

年間テーマ：上杉家歴代の文書管理と歴史編纂  
 期間テーマ：重定と先例 8月24日（木）～9月26日（火）

資料名	頁数	法量 (cm)	時代	番号	所蔵
複製 国宝上杉本洛中洛外図屏風	六曲一双	各160.4×365.2	原本 室町～桃山 (16世紀)	複製A	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (歴代官物記録) 1 徳川家重一字状	1通	46.2×66.1	延享3年 (1746) 12月5日	1911	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (歴代官物記録) 2 上杉重定名乗勘文	1通	39.5×53.5	(延享3年・1746 12月)	1913	上杉博物館
上杉文書 3 「定例明鑑」 一～五	5冊	22.8×15.2	宝暦10年 (1760) 3月	538	上杉博物館
上杉文書 4 「先祖書」 (片山一積部分)	1冊	29.4×18.8	天明5年 (1785) 10月	968-15	上杉博物館

上杉文華館では、国宝上杉本洛中洛外図屏風（原本または複製）とともに、「上杉家文書」を毎月入れ替えながら常時展示しています。上杉家文書は、江戸時代以降に行われた文書の管理や歴史編纂を通じて、中世以来の上杉家の由緒や権威、特定の当主の事績を示す文書が収集、選別され、移動や変化を続けながら、現在の構成（2018通、4帖、26冊、保存容器として両掛入文書箱、精撰古案両掛入文書箱、黒塗掛硯箱、赤筆笥 乾・坤2棹、附として歴代年譜325冊）になったことが明らかになっています。

また、「上杉家文書」とは別に「上杉文書」と呼ばれる藩政文書を中心とした1万点弱の史料群があり、米沢市では令和3年度から文化庁の「地域活性化のための特色ある文化財調査・活用事業」の補助を受け、調査に取り組んでいます。その中核は文書管理や歴史編纂を担った、江戸時代の御記録方や、近代の上杉家記録編纂所総裁伊佐早謙の関連文書です。上杉文書には、国宝「上杉家文書」を深く理解するための手がかりが、豊富に含まれています。

今年度は本調査事業の成果を活用して2つの史料群を紐解きながら、江戸時代から近代にかけて、文書の具体的な管理方法と歴史や記録の編纂事業、その背景にある藩政の状況や世情をご紹介します。永年にわたり文書を守り伝え、活用してきた人々の営為にご注目下さい。

〔重定と先例〕

上杉重定は5代藩主吉憲の第四子です。6代藩主宗憲（享保19年・1734 死去）と、7代藩主宗房（延享3年・1746 死去）の2人の兄が相次いで死去したため、延享3年8月、重定は思いがけず8代藩主となりました。

重定の治世下では、天候不順や飢饉により領内は疲弊し、藩の財政も悪化の一途をたどります。しかし重定自身は政治にあまり関心を示さず、寵臣の森利真が実権を握りました。森は藩政の改革に取り組みますが、専断的な政治姿勢のため重臣層に疎まれ、宝暦13年（1763）に殺害されます。重定のもとで森が推し進めた改革の一部は、明和4年（1767）に9代藩主となった上杉鷹山の治世下に継承されていきます。

その一つが先例集の編纂です。財政が悪化し、上杉家の伝統や権威がゆらぐ状況下でこそ、先例を記録し受け継ぐことが重視されたと考えられます。「定例明鑑」（資料3）は重定の指示で編纂に着手し、森利真が総監して宝暦10年（1760）に完成しました。上杉家の年中行事や儀式の先例に加え、領内の地誌や上杉家の系譜、基本法令も収録した、全25冊にのぼる先例集です。

今回はこの先例集を紐解きながら、国宝「上杉家文書」のうち重定の元服関係の文書（資料1、2）の位置づけなどをご紹介します。